

「それで」

狭苦しい部屋の中で、長喜ちようきが話を切り出した。

目の前の小男は、黙々と茶をすすっている。年の頃は、四十になろうかならないか、といったところだろう。ひどい猫背のせいで、それでなくてもぽつとしない風采が一層みすぼらしく見える。

「失礼しました。本日は貴重なお時間をとっていただき申し訳ありません。」

男が湯呑を置いた。ずっとすすっていたくせに、量はほとんど減っていないように見えた。男の声は、背中から出てきたような、やたらと上ずったものだった。この風采と声のせいで随分とこれまで損をしてきたのだろうなど、長喜は自分の出っ腹を撫でた。

「事前に、文でお伝えした通りです。先生には、かつてを知る同業者の一人として、あの方のことをお話しいただきたいと思っています。」

随分と、本題に入るのが早い。こういう無遠慮さが、一流の学者には必要なのだろうか。

そもそも今日だって、こちらが断ったにもかかわらず勝手に来ているのだ。

「齋藤…さんだったか」

長喜ちようきが嗚れ声を振り絞る。

「はい。齋藤月岑げっしんと申します。」

「それならばこちらからも文でお返事をした通りだ。私は、確かにあの男のことをよく知っている。でも、あの男について私から話せることは何もない。それは、あの男が望んでいたことだからだ。」

「失礼ながら、私にはそうは思えません。」

長喜が言い終わらないうちに、月岑と名乗った小男の甲高い声が素っ頓狂に遮ってきた。

「これを、ご覧ください。」

月岑が脇に置いていた風呂敷包みを恭しく開陳した。中から、月岑本人のようにくちやくちやになった書物が一冊顔を覗かせた。表題には、『浮世絵類考』うきよえらいこうとある。

「私は現在、この時代の浮世絵師の百科事典ともいうべきこの書物を編纂している最中です。それで、色々調べ回ってはいるのですが、この方のことだけどうにも情報が断片的で、なかなか氏素性が見えてこない。そこで、この方と親しかったという長喜先生にお話を聞くのが早いのではないかと思っただのです」

月岑が早口にまくしたてながら、浮世絵類考を開いた。目当ての頁には、余白の部分に真新しい朱書きが入っていた。月岑が指差すその朱書きの末尾には

「栄松えいしょう斎長喜老人の話なり」とある。

「ここにある通りです先生。どなたか別の方にお話をしていませんか。お話をしたからこそ、この朱書きが生まれたではありませんか」

長喜は目を閉じた。最近歳のせいか、随分と記憶が薄れるのが早くなってきた。確かに、いま相對している月岑のように話を聞きたいとやってきた男がいたのは事実である。でももう、顔も名前も思い出せない。それにしても、こんな個人的な朱筆をこの男もよく見つけてきたものである。

「先生の考えていることは分かります。私には、個人的に親しくしている書物の蒐集家がいるのです」

月岑は、苦悶の表情を浮かべる長喜を気にする様子もなく話を続けた。

「それで、そんなことはどうでもいいのです。先生もこんな風に口を滑らせたからには、本当はこの人について語りたくて仕方ないのではありませんか」
長喜は、両の脛を閉じたまま黙っていた。

「それよりも、です。私がこの人の情報を集めて回っていると、ところを総合すると、この人自身は世に名前が出ることを望んでいたように思えてしまうが、ないのです。だとすれば、この人の名や氏素性を後世に伝わるような形で残すのは、我々の使命ではないでしょうか。幸いなことに、この人にはそれに値

するだけの傑出した筆力があります。」

長喜は小さくこくりと頷いたが、月岑がこの頷きを認識したかどうかは分らなかった。

「にもかかわらず、生前のこの人を知る方は、先生も含めてみな一様に口が固いのです。このあたりに、この人の氏素性を解く鍵があるのではないかと思っ

てはいるのですが」
頭は、切れるらしい。長喜は観念したように薄く目を開け、独り言のような小さな声で呟いた。

「何年だ。」

「はい？」

月岑がすぐさま聞き返してきた。

「今年は、天保何年だったか。」

長喜が少し声を高くした。

「十五年です。天保十五年。」

「そうすると、文政三年から数えると何年経つてることになる？」

月岑は右手の人差し指を左の掌に当てながらしばし考えた。

「文政は…十三年が天保元年ですから…二十四年ですな。」

「そうか…。もう二十四年か。」

長喜は遠くを見ようとしたが、目に入ってくるのは天井の煤ぼけた梁ばかりだった。

「お主の言う通り、奴は世俗的な名誉ばかりを追い求めていたでしょうもない俗物だった。だから、かは分からんが、結局奴の求めた世俗的な名誉はいぞ得られぬまま彼岸に行ってしまったよ」

長喜は自分の茶を一口すすると、立ち上がりながら自分のすぐ横にあった障子に手をかけた。目の焦点は、障子の向こう側の景色に合っていた。

「でも、奴の筆力だけは間違いなく本物だった。奴が素性を明かさないうように活動していたから、別の絵師の筆名なのではないかという噂まで奴の生前から立つ始末で、私は朋友としてそれが一番齒がゆかった。本人は本人として確かにここにあるのに、なぜ別人扱いされなければならないのか、と」

長喜の声音には、静かな迫力と怒気がこもっていた。狭い空気の中に響き渡る長喜の心強い説法に後押しされて、月岑の丸まった背も心なしか少しまっすぐになっていた。

「このまま奴が謎の絵師として消えていくのは、私としても実に忍びない。だから、私は少なくとも貴殿に奴の話をしようと思う。」

長喜がざろりと月岑の眼を睨みつけた。月岑は、少し戸惑っているように見えた。

「奴の、東洲齋写楽の話を。」

二

「ええそうです。写楽です。」

葛屋重三郎つたやじゅうざぶろうが一冊の本を畳の上に投げ捨てた。長喜はそれを手に取り、再びまじまじとねめつけた。描かれているのは、一人の武士らしき男である。への字に結んだ口元、荒れた月代、躍動する四肢、そしてどこか悲愴感を漂わせる眼。どこをとっても、非凡な筆使いである。

「葛重は、こいつには声をかけねえのかい。」

長喜は手に取った本越しに、上目使いを葛屋に投げつけた。

「そいつは居所も本名も書いてないんですよ。声をかけようにもかけようがないでしょう。」

長喜に背を向けたままの葛屋の返事は素っ気なかった。

「それに、です。」

葛屋は一瞬言いよどんだ。

「なんだ。」

「この世界で功成り名遂げるには、ある程度『俺が俺が』の気概がないとダメです。居所も本名も明かせないような引つ込み思案に、こちらから接触してやろうとは思わないですね。」

葛屋は、先ほどの沈黙を掻き消すかのように、あちこち動き回りながら早口でまくしたてた。

「はん。歌麿うたまろみたいなのを拾ってきた天下の蔦重の科白とは思えないね。」

長喜は、敢えて挑発的な言辞を弄してみた。名を指された歌麿は、さつきから同じ部屋で黙々と女の絵を描いている。その表情には、紙背に撒き散らすような力強い眼光が宿っているが、視線の先にあるのは自分の描いている女である。長喜がとぼけた面相で歌麿の筆の運びを眺めていると、蔦重がくるりと向き直して、さつきよりもひどい早口で一氣にしゃべった。

「不正確でしたね。言い換えます。私がわざわざ接触するほどの価値はこいつにはないと思います。巧いことは巧いですが、歌麿ほどではありません。」
こうなると、もう何を話しても結論が変わることがないのが蔦重という男である。

「分かったよ。お前にやる気がないのなら、俺が探そう。なあ歌麿。お前もこいつには才があると思うだろ。」

長喜は手に取った『耕才志才こうさいしさい』の頁を開いたまま歌麿の眼前につき出した。歌麿は、一瞬ギョロリと長喜の方を睥睨したかと思うと、何も言わずにすぐに自分の描いている「女」に視線を戻した。

表からは、呼び込みたちの活気ある声が絶え間なく響いていた。

『耕才志才』

蔦屋が自分の版元から出している本である。「耕書堂こうしよどう」という蔦屋の版元と同じ発想で名付けられているが、要は市井にある戯作や絵描の才を発掘するための書である。中は、そういった在野の趣味人が「投稿」してきた絵と文で満ちている。

その中でひとときわ異彩を放っていたのが、写楽だった。毎回、三十本以上の大量の絵を送り出してきている。質も相当に高い。そのくせ本来明らかにすべき住処と姓名を一切伏せており、素性が一切分からない。

長喜は、この男（女やも知れぬ）の絵を一目見たとき、背筋が震えた。これは、並大抵の筆力ではない。絶対に世に出るべき才である。こいつを巷間に埋

もれたまま朽ち果てさせたならば、『耕才志才』の書名が泣くというものであろう。

それだけではなく、長喜はこの写楽という絵師に、歌麿やもつと若いころの自分のようなある種の自信のなさを見てとつてもいた。創造者には、そのような人間も多い。もしこちらから声をかけなければ、絶対に向こうから出てくるのではないのではないだろうか。「才さえ示せば、向こうから勝手に接触してくるだろう」というよくある勘違いに陥っているのではないだろうか。もしそうだとしたら、誰かがその間違いを正し、写楽を浮世に引っ張り出してくることがある。長喜は、不思議な使命感に燃えていた。

「蔦重。こいつは、ここでしか売ってねえんだよな。」

長喜が片手に持った耕才志才を振りながら大きな声を出した。いつの間にか長喜の視界から消えていた蔦重に、呼びかけたつもりだった。

案の定しばらく返事はなかったが、蔦重は凶鑑のような大きな本を抱えたまま奥から戻ってきた。

「当たり前ですよ。そんな本、売れるわけがありません。」

「これは毎号何冊ぐらい売れるんだ。」

「私も数えたことはないですが、投稿してくる奴しか買わないんじゃないでしょうか？」

「俺が見たところ、いつも投稿してくる『常連』は、だいたい三十人ぐらいなんだが。」

「じゃあ、そんなもんでしよう。」

「写楽は買ってんのかな。」

「まあ、自分の送ったもんが載ったかどうかに興味がないような聖人君子は、この業界にはいないですよ。その自己顕示欲を押さえつけるのが、私の役目です。」

蔦屋の言っていることはその通りだろう。そして、写楽みたいな自信のない人間ほど、反比例するように自己顕示欲は旺盛なものである。長喜は、この業界にいる人間に、あるいはこの業界を志す人間に、何人もそのようなともがらを見てきた。

「じゃあ次の耕才志才の発売日にここで張ってりや、絶対に写楽が現れるな。」
「そうかもしれないね。お任せしますよ。」

さっきの大きな本を開いて何やら凝視している蔦屋の返事は、どこまでも素
つ気なかった。

「分かった。分かった。じゃあ、また来るぜ。」

長喜が手に持った耕才志才を懐に入れて、立ち上がるうとした。

「待ってください。」

蔦屋がやにわにやけに通る声を出した。

「売り物を持っていかれるなら買ってもらいませんと。」

長喜は懐の耕才志才を触ったまま、ピタリと立ち止まった。

「そういうところはやっぱり商売人だなあ。俺たちとは、住んでいる世界が違う
ね。」

「払わないなら、置いていってください。」

「払うよ。いくらだ。」

「六百五十文です。」

「六百五十文もすんのかこれ！」

長喜の喉からいの一音に出たのは、驚きの声だった。

「六百五十文っていったら上等な股引が買えるぜ。」

「出してる部数が少ないんですよ。その分一冊が高くなるのは道理ってもんで
しょう。」

「どうにも分からんね。商売の道理ってのは。」

長喜は懐に両手を突っ込んだまま、体を反らせて後方の歌麿を見た。相も変
わらず黙々と女の絵を描いている。

「歌麿。ちよつと立て替えといてくんねえか。どうせしこたま稼いでんだろ。」

歌麿から、返事はなかった。代わりに蔦重が凶鑑とにらめっこをしたまま声
を出した。

「長喜先生ももう少し真面目に働いてくれればもつとちゃんと稼げると思
いますよ。この間頼んだ版下絵も、まだ仕上がってないでしょう。皴寄せは、
彫師と摺師にいくんですから。」

「やるよ。今日帰ってやるよ。」

「そう言って翌日に仕上がってたことなんかこれまで一回もないじゃないですか。そうやってずるずる引き伸ばしているうちに、いつつも満遍なくべ切を破るんですから。」

そこを言われると長喜もばつが悪い。なぜかと言えば、真実だからである。長喜が返答に窮したまま固まっていると、低い声が背中の方から響いてきた。「俺のを、やろう。」

歌麿だった。

長喜が振り向くと、歌麿は懐から、長喜が持っているのと同じ最新の耕才志才を取り出していた。

「何だ。おめえも買ってんのか。」

三

耕書堂の朝は、早い。

蔦屋の性格なのだろうが、えらく早い時間から店に出ている。そして、客もないのに店を開けている。

自分の素性を知られたくない写楽である。耕才志才を買うにしても、人目の少ない早朝の時間帯を選ぶだろう。

長喜は再び写楽の書いた武者絵をなめまわすように睥睨した。絵の表情に釣られて、自分も自然と眉間に皺が寄っていく。何度見ても、睨めつけているだけで無礼討ちされそうな生気が宿った武者である。

「顔料や筆はそんな上等なものじゃねえだろうなあ。ま、それでこの迫力が出るのが腕なんだろうな。とはいえ本当に貧乏だったら最低限の画材も揃えらんねえだろうし、こんな絵を描いてる暇もねえだろうから、ある程度金はある身分なんだろう。何か生業があるか、谷町がいるか。」

長喜は寝っころがった状態で思いを馳せる。

「そして、こういう迫力のある絵を描く奴に限って内面はとんでもない臆病者だったりするからな。あるいは歌麿みたいな出歯亀かもしれんなあ。」

耳元にある行灯の火が熱い。長喜の額から、汗が一筋こぼれ落ちた。

「先生。なんで寝てるんですかこんなところで。版下絵が上がってないって言ったじゃないですか。」

長喜の眼前に躍り出たのは、蔦屋の顔だった。どうやら、あのまま寝入ってしまったようだ。長喜が両手をばたつかせると、歌麿からもらった耕才志才に触った。

長喜はそれを掴み、蔦屋に向かって口を開いた。蔦屋は枕元に立ってこちらを覗き込んでいる。

「言っただろ。俺は写楽の正体を突き止めるんだ。」

「初めて聞きましたよ。そんなこと。」

「写楽はどうしようもなく柔弱な意気地なしだ。だったらコイツを買いに来るのも人目につかない早朝だろう。」

長喜は手にとった耕才志才を蔦屋の眼前に突き出した。

「この店で寝なくてもいいじゃないですか。」

「俺は朝が弱いんだ。血の巡りが悪くてな」

蔦屋は、一瞬黙った。呆れているようだった。

「版下絵はどうするんですか。帰ってやるんじゃないんですか。」

「この件が終わったらすぐ片付けるさ。写楽を捕まえれば、俺の絵の何倍も稼げる逸材になるぞ。」

「まあ確かに、先生の絵は歌麿の何十分の一しか売れないですからね。」
「ぐっ。」

こういうことを言うのが蔦屋という人間の嫌らしい部分である。長喜はできるだけ動揺を悟られまいと歯を食いしばった。

「ところで、この時間に出てくるのは蔦重くらいだろう。こんな時間に耕才志才を買って帰るような妙な奴を、見たことはないのか。」

自分で言いながら、長喜ははっと気が付いた。そうだ。蔦屋ならとつくに写楽らしき人物に見当がついているかもしれないのだ。

天井の方向に見える蔦屋は、両手を腰につけて、鼻からため息のような空気を出した。長喜はそれを逃さず畳み掛けた。

「その反応は、いるってことだな？　どんな奴なんだ。どうせほっかむりみた

いなものを身につけた分かりやすく少し抜けてるたわけもんなだろう。」
「どういうことですかそれは。」

「俺の見立てだ。写楽つてのはどうしようもない臆病者なんだけど、そのくせ人一倍自信も強い倒錯者なんだ。自らに内在するその倒錯に五体を引き裂かれそうになりながら、なんとかかんとか毎日をやりと過ごしているんだ。」

長喜は自分の推理を開陳しながらだんだんと体が昂ってきた。胸ははだけ、掛布団はもうどこかにいつてしまった。

鳶屋は、またも口に含んだため息を鼻から出した。

「いますよ。」

「え？」

予想外の返答に、長喜はわが耳を疑った。

「耕才志才の発売日の早朝に毎回ほっかむりをして本を買いに来る男がいますよ。先生の見立て通り、終始オドオドしている不審者です。」

鳶屋の声には、諦めが込められていた。

「そいつだ鳶重。いくつぐらいだ。背格好はどんくらいで、どんな声だ。」

「質問は一つずつ……」

「ごめんください！！」

鳶屋が言い終わらないうちに、朝靄の残る通油町に似つかわしくない大音声が響き渡った。でかい声の割には、妙に初々しくて、乳飲み子の頬のように赤い声だった。ちょうど、大きな声を出し慣れていない人間が、音量の調節を間違えたような調子である。もしかしたら、食い詰めた純朴な青年が慣れない押し込み強盗でも試みているのかもしれない。

「お客さんだけ店主。」

長喜が寝ところがあったまま店頭の方を親指で指した。しかし鳶屋は、長喜に背を向けると、そのまま固まってしまった。その状態のまま、結構な時間が流れた。

「おい鳶重。行った方がいいんじゃないか。普通の客って雰囲気じゃなかったぞ。」

たまりかねた長喜が口火を切った。それにしても、向こうも「ごめんくださ

い」と一回ぶち上げたきりうんともすんとも言わなくなっている。

「あいつです……」

蔦重がぼそりとつぶやいた。

「え？」

「さっき言った変な客ってのはあいつです……」

「なに？」

長喜は飛び起きて、店頭に向かって駆け出した。はだけた襦袢も乱れた髪も無視して、一心不乱に駆けた。

しかし長喜が店の前の通りまで出ると、もう誰の姿もなかった。

「バカ野郎！ あの手の意気地なしは、店に誰もいないってなったら諦めて帰っちゃうだろうが！」

というよりは、奴を帰らせて長喜と会わせないのが蔦屋の狙いだったのだろう。嫌がらせだろうか。

通りに出た長喜が左右に目をやると、左手に所在無げにふらつく男の背中が見えた。頭には、ほっかむりらしき布も見える。あいつだろうか。いや、あいつということにしよう。長喜は声をかけるべく駆け出そうとして、はっと思い止まった。

「そうだ。違う違う。もともと尾行してまず家突き止めるつもりだったんじゃないか。」

長喜は袴の紐を結び直した。後ろでは、蔦屋が店先にのこのこと出てきていた。

四

「あれ、どうなったんですか。」

蔦屋が版下絵を握りしめたまま上目づかいを長喜の方に投げつけてきた。

「どうなったって、頼まれていた仕事はこれで全部上がったはずだぞ。」

長喜は口元に笑みを浮かべた。

「そのことじゃあないです。あれですよあれ。」

版下絵を握る蔦屋の両の拳が赤く滲み、小刻みに震えだしてきた。

「おいおい。俺が仕上げた商品だ。破らないでくれよ。ただでさえ葛重は手汗がすごいんだから。」

長喜が少し前に身を乗り出した。

「分かりました。すみません。」

葛屋が絵を置いた。長喜は、天真爛漫な両目を見開いている。まだ葛屋が何のことを言っているかピンと来ていない表情だった。

「あの……」

「で、何だいあれって。」

二人はほぼ同時に口を開いた。葛屋は、ばつが悪そうに咳払いをすると、そのまままた黙りこくってしまった。

「なんなんだい葛重さんよう。」

たまりかねた長喜が腕を組みながら天井に向かって話しかけた。言い終わらないうちに、葛屋が妙に通る声を響かせた。

「あいつとは、接触できたんですか。」

「あいつじゃ分らん。」

「写楽ですよ。東洲齋写楽。」

「写楽？ 東洲齋？」

葛屋の口から出た名前は、しばらく長喜の頭の中でふわふわと浮遊した。本当に、しばらくピンと来なかった。

「からかうのはよしてください。先生がご執心だった写楽ですよ。耕才志才の常連の。」

長喜の頭の中に新しく、「耕才志才」という単語が飛び込んできた。それは既に隅に逃げ込みつつあった「写楽」という語を捕まえて、一つの像を結実した。

「ああ〜写楽。写楽な！」

長喜はひととき大きな声を出した後に、葛屋に気付かれないように小さくにんまりと口元を歪ませた。この葛屋が、自分で写楽のことを聞き出してくるとは。長喜の胸の中に、とても無邪気で、とても残虐な塊が鎌首をもたげた。

「そう言う葛重の方がご執心じゃないか。」

長喜は畳に両手をつけて蔦重の顎を下から覗き込むように顔を突き出した。
「正体は分かったんですか。あるいは住処は」

蔦屋は、長喜の豹変に触れるのも面倒というようなあきれた表情で平静を装いながら、敢えて何事もなかったかのように会話を進めようとした。

長喜も、ここで蔦屋に臍を曲げられては困ると思ひ直し、蔦屋に乗っかることにした。

「ああ。もう二ヶ月は前になるか。あとをつけていたら住処は分かったぞ。これがまた意外なところでああ。」

「どこですか。」

「どこだと思おう？」

「早く言ってください。」

蔦屋の剣幕に押された長喜は、いったん始めようとした問答形式をすぐに引つめた。

「八丁堀の武家屋敷だ。こっから近いぞ。」

「八丁堀ならそんなに近くもないじゃないですか。あんなところから歩いてきてんですね。それより、武士だということですか。」

「武士だとなんなんだ。」

「いやまあ、武士には最近ひどい目に遭わされましたからねえ。」

蔦屋は遠い目をした。恐らく、三年前のことを言っているのだろう。商魂たくましい蔦屋がああ程度のことをまだ嫌な思い出として覚えているのが長喜には意外でもあった。

「まあまあ、武士にも話の分かる奴はいくらでもいるじゃないか。鳥文齋ちようぶんさいえいし栄之先生だつて元は旗本なんだし。蔦重をしこたま儲けさせた南畝なんぼ先生も御家人だろう。」

「武士に色々あるつてのはその通りです。あいつはどういう武士なんですか。」

「さあ、そこまではまだ分からん。」

「分からないんですか？ 会ってないんですか？」

ここで蔦屋が膝から立ち上がった。少し、いらついているように見えた。

「まだ奴の住処に俺のしたためた文を置いてきただけだ。」

「回りくどいですね。」

「つけていったのにいきなり会っちゃあまずいだろ。でまあ、文は出したのだが、もう二ヶ月近くなるのに一向に返事が来ん。」

「なんて書いたんですか。」

「俺の名前で、『お前には才能があるから一度会って話したい』という話だ。」

「

「天下の栄松えいしょうさいちようき斎長喜からそんな文をもらったのになしの礫なんですか。耕才

志才に絵まで送ってくるような奴が。」

「ハハハ。俺も偉くなったもんだな。」

「締め切りを守ればもつと偉くなりますよ。」

鳶屋がいきなり冷静な口調でぼそつと呟いた。話があらぬ方向に進みそうだったので、長喜は強引に元に戻すことにした。

「とにかくだ。武士だから名乗り出られない事情があるのかもしれん。あるいは絵を描く若者に共通して見られる糸のような打たれ弱さかもしれん。そろそろ、直接会いに行ってもいいかと思ってる。」

「どうやって会うんですか。文にすら反応しない奴なんですから、いきなり行っても居留守使うかもしれませんよ。」

「次の耕才志才が出る日にまた尾けていくさ。早朝なら比較的時間がとれるんじゃないか？ いつなんだ。次の耕才志才は。」

「えつといつでしたっけ…」

「明日だ。」

鳶屋が逡巡していると、障子ががらつと開いて、隙間から歌麿が顔を突き出してきた。突如の闖入者に、暫しの沈黙が流れた。

「お前も来るか？」

長喜は思い切って口を開いた。

「行かん。」

歌麿の受け答えは、相変わらず素っ気なかった。

「そうか。」

長喜はあごの不精髭を撫でながら、二ヶ月前に尾けた写楽の背中を思い出していた。

藍色の、羽織である。武士のくせに皺だらけでヨレヨレである。おそらく、二ヶ月前に着ていたものと一緒だろう。十中八九、きちんと洗っていないのではないだろうか。絵師には、自分の生活には無頓着な輩が多い。

もうすぐ八丁堀につく。腐つても武家屋敷なので、中に入られたら接触は難しいだろう。その前に、声をかけなければならぬ。幸い早朝も早朝なので、辺りの人通りはまだ少ない。日の出直後特有の冷気が、長喜の眠気を剥ぎ取っていく。

長喜はここぞとばかりに足を早めた。もう、気付かれてもよかった。一步、また一步と藍色の羽織に向かつてのしと歩を進めていく。視界に入っている写楽の背中はどうどんと大きくなっていくが、当の本人は一向に振り返ろうとする気配がない。あるいは、敢えて無視しようとしているのか。

手を伸ばせば届く距離にまで近付いた写楽の背中を凝視しながら、長喜はその尻を蹴り上げた。その一撃には、一向にこちらと接触しようしない写楽に對する怒りが混じっていた。

写楽は前に大きくつんのめり、両手を地についた。しばらくその姿勢のままじっとしていたかと思うと、膝の砂を払いながら、徐にこちらを向いた。

初めて見る写楽の顔は、実に捉えどころがなかった。どこにでもいる顔だろう。そしてその目と眉からは、突如蹴られた憤りや困惑のようなものは感じられなかった。どこまでも、所在無げであった。

長喜も写楽のこの面差しを見てはたと立ち止まった。こういう種類の人間なら、いきなりケツを蹴り上げて心も閉ざすだけだったかもしれない。長喜の脳裏に刹那「後悔」の二文字が踊ったが、もうやってしまったものはどうしようもない。長喜は自分の失敗を誤魔化すように、敢えて磊落に大きな声を出した。

「ついに会えたな東洲齋!!!」

長喜はくわっと顔の穴という穴を開いたが、写楽の表情は少しも変わらなかった。どこまでも、所在無げであった。長喜は敢えて「東洲斎」と呼んだことが間違いだったかもしれないとまたも後悔しつつ、強引に話を続けていくことにした。

「俺は長喜だ！ 栄松斎長喜だ！ もう二ヶ月ぐらい前になるが、俺が届けた文は見たか！」

自分の名前を聞いて写楽の目の翳りが少しでも晴れることを期待したが、そううまくはいかなかった。写楽の眉目はどこまでも物憂げにハの字の形を示している。内気な奴だとは予想していたが、ここまで会話が成り立たないのは予想外である。

長喜は、だんだんと自信がなくなってきた。

「写楽！ もっと喜んだらどうだ！ あの栄松斎長喜先生が直接会いに来てくれたんだぞ！ 俺はお前の画才にほれ込んでるんだ！ 写楽！」

写楽は二重の瞼に訝しみを湛えながら長喜の方にゆっくりと体を回し、正対した。長喜はなぜか写楽の迫力に気圧されながらも、大きな声を出し続けた。

「どうした写楽！ 俺は蔦屋とも懇ろにしてるんだ！ あいつに口を利いてやるぞ！ 絵で身を立てる道が開けるんだ！ こんなおいしい話はそうそう転がってないぞ！」

写楽は表情を変えぬまま、すり足で長喜ににじり寄ってきた。長喜は後ずさりしたくなつたが、必死に土俵際にかかとを残した。写楽の顔は、もう肉迫している。

「写楽！ 何とか言ってくれ！」

写楽はそれでもしばらく喋らなかつた。長喜の目を睨みつけたまま、押し黙っていた。

「写楽……！！」

のけぞった姿勢の長喜は、かすれた声しか出せなかつた。長喜が諦めて一歩後ずさりしようとした刹那、写楽がようやく口を開いた。

「本物ですか？」

写楽の声は、朝の冷気に溶け出してよく聞こえなかつた。ものすごく、小さ

な声だった。それも、生まれつきの小声という感じではない。ちょうど二ヶ月前に写楽が耕書堂の店先で大声を出した時と、同じ感想を長喜は抱いた。人と話し慣れていないために適切な音量が分かっていないという感じなのである。長喜には、なぜかはつきりとそう思えた。

「本物かとはどういふことだ写楽。俺が偽者の栄松齋長喜だと思っているのか？」

「私は、本物の長喜先生を拝見したことはございませんから。」

「そりゃあそうだろう。まあ、別に何をどうやれば俺が本物だと信じてもらえるかも分かんが、偽者だったらもつと分かり易く名の通っている絵師を選ばんか？ それこそ歌麿とか……」

長喜の語尾はしりすぼみになった。自分の言っていることにそれほど説得力がないと思ひ直したからだ。でも、写楽は自分の語尾がしりすぼみになった理由を「歌麿と自分を比べてみじめに思ったのだな」と考えるかも知れなかった。それは、それで嫌だった。この短い時間にそんな複雑なことまで考えってしまう自分も嫌だった。

「まあ、いいさ。俺の口から言えるのは、俺は本物だつてことだけだ。立ち話もなんだから、少し落ち着いて話をしないか？ お前の家でいいぞ」

これと言った瞬間に写楽の頬が一気に青ざめた。長喜が家に来るのはまずいという表情である。やはり、武士の身分でこんな浮世絵を描き耽っていることを周囲に勘付かれたくないのだろうか。

「い、家はダメです。」

写楽はプルプルと頬を振るわせながら、プルプルと首を振っていた。

「じゃあ、どこかいいとこ知らないか？」

「こんな朝早くからやっているところは近くにないですよ。」

写楽の台詞はだんだんとはつきりと聞こえるようになってきた。よほど家にはこの異分子を入れたくないらしい。それとも、適切な音量というものが分かってくるだけだろうか。

「そんならもう隅田川の土手にいくしかないな。」

「隅田川……」

長喜は写楽の腕をグイと掴み、そのまま引つ張っていった。

「お前、本名は？」

「十郎兵衛です。斎藤十郎兵衛。」

長喜と写楽は、並んで腰かけていた。川には荷を満載にした小舟が何艘か行き来している。頬に当たる風は、鋭いまでに澄んでいる。

「武士なのか？」

「武士です。その中でも、ちょっと特殊ですが。」

「なんだそりゃ。どういうことだ。」

「私は、大名家お抱えの能役者なのです。」

「能役者。ふーん。」

長喜には、全然ピンと来なかった。それよりも、写楽がどんどんしゃべるようになっていくことに少し面喰らっていた。最初に会った時の無口っぷりが嘘のようである。やはり、この男は、本当はしゃべりたがりなのではないだろうか。箍が外れている今なら、聞けば何でも喋るのではないだろうか。

「能役者って、能をやるのか？」

「私は阿州侯から俸禄をもらう身なので、阿州侯が何か典礼や儀式をやるというときに駆り出されるんです。」

「阿州っていうと…」

「阿波ですよ。阿波。」

「ああ阿波。阿波な。」

長喜の頭の中には日本の本の地図が浮かんだが、阿波がどこかは皆目検討がつかなかった。

「遠いですよ阿波は。私もまだ二、三回しか行ったことがないですが。」

写楽が息つく暇もなく話を続けたので、長喜の頭の中の地図は露と消えた。

長喜は、自分の無知がさらけ出される前に話題を他に移すことにした。

「それで、お前さんは何で絵を耕才志才に送りつけてきたんだ。立派な職業があるじゃないか。」

「絵で身を立てられればいいな、と思っていました。」

「なんだ。それなら俺の文に反応してくれてもよかったじゃないか。渡りに船なんだから。」

そう言った瞬間長喜の視界に目の前の川を進む船が入ってきた。自分の発言が少しダジャレめいてしまったことを長喜は後悔したが、写楽は気にも留めていなかった。そもそも、船が見えている様子がなかった。

「いえまあ、鳶屋さんのところで身を立てるとなると……うーんと」

隅田川に来てから饒舌になっていた写楽が初めて言いよどんだ。このあたりに、この男の謎を解く鍵がありそうである。

「何だ。言いにくいことがあるならばつきり言ってみな。俺はお前の全面的な協力者だ。どんな内容であろうと受け止めてやる」

「……………」

写楽はしばらく顎に手を当てて考え込んでいた。

「版画……じゃないですか。」

「へ？」

「鳶屋が力を入れているのは、版画じゃないですか。」

長喜には、これから世話になろうとしている鳶屋を呼び捨てにするある種の勘の悪さがまず気になってしまった。逆に言うと、そこが気になり過ぎて、写楽の言っていることの中身がすんなりと呑み込めなかった。

「版画が嫌なのか？ あれがあるから絵が大量に売れて、絵師が身を持ち崩さずにすんでいるんだぞ。」

「版画っていうのは、絵師が描いた絵をもとに、版木を作るんですよね。」

「そうだ。その版木で絵を大量に刷るんだ。彫師さまさまだ。」

「それはもう、彫師の作品であって、絵師の作品ではないですよね。」

長喜は頭にガンと大きな衝撃を喰らい、昏倒しそうになった。隣に座っているこの莫迦は、どうやらそのあたりから説教しないといけない段階の人間らしい。こいつは、いったい、何になろうとしているのだろうか。

長喜は横溢しそうになる怒りを必死で抑え込みながら、喉から声を絞り出した。絞り過ぎた結果、少し素っ頓狂な響きになってしまった。

「なあ写楽。お前みたいなことを言う奴は、若くて鼻息が荒くて世間知らずの

絵描きにくらでもいるんだ。そういう奴に限って、浮世絵作りの現場を全然知らないから、彫師が何をやっているかもよく分からずに悪口ばかり叩くんだ。」

「はい。」

写楽には、別に悪びれる様子もなかった。長喜がイライラしているのにそもそも気付いていない様子である。

「彫師っていうのはなあ、俺らが描いた版下絵をもとに版木を作ってるんだ。俺らが描いた絵を、正確に版木の上に再現する職能集団なんだ。それはそれは、ものすごい技術なんだ。そのくせ世に出るのは版下絵を描いた絵師の名前だけで、自分たちの名前は出ない。そんな状況に文句も言わず、ひたすら版木を彫り続けているんだ。まいったか。」

「はあ。」

写楽は、まだピンと来ていない様子である。

「だいたいお前の絵が載っている耕才志才だつてなあ。蔦屋んところにいる見習いの彫師がお前らが送ってきた絵をもとに版木を作っているから本になっているんだぞ。」

「ああ、やっぱり見習いなんですな。道理で線がフラフラしているわけだ。」
長喜の脳天にまた大きな鉄の塊が落ちてきた。版画が嫌なら、なんで蔦屋のところ絵を送りつけていたのだろうかという根本的などころを長喜は聞きたかった。

「お前さん、版画が嫌なら何で耕才志才に絵を送ってたんだ。」

写楽は長喜に一瞬はっとした表情を見せた後、正面に向き直って俯いてしまった。こいつはこんなすぐに分かる矛盾を抱えたまま「版画は嫌だ」などというきがっていたのだろうか。

ここで齧を曲げられても困るので、長喜は脇から攻めてみることにした。

「版画が嫌なら、お前さんどうやって絵で身を立てようとしてるんだ？ 自分の筆で描いた絵だけ売って暮らすつもりだったのか？ それは絵師じゃなくて画家っていうんだぞ。今のご時世、それをやろうと思ったら大名家や大きな寺社から襖や掛け軸とかの注文を受けるよりないぞ。それも最近の白

河様以来の締め付けが厳しいせいで、注文自体が先細ってるからなあ。」

「ええ。でもそうやって大名家から注文を受けて絵を描くって言うのは真つ平御免です。」

長喜が独り言のようにまくしたてていたら、写楽が乗っかってきた。言っている写楽の無茶苦茶さに長喜はすぐ気が付いたが、取り敢えず泳がせてみることにした。

「何でまた、嫌なんだ」

「大名家から注文を受けて何かする、っていうのは今の私の能役者の立場と寸分違わないではないですか。私は、今の状態から脱したいから絵で身を立てたいと思っていますですよ。」

「うん、まあそれは分かるが、じゃあなんで今の状態は嫌なんだ。」

「殿さまから注文を受けてやる儀式や典礼としての能っていうのは、古くから続く伝統ですから、中身が決まりきっているんです。そこに、『私』はない。

私は、自分を押し殺して大して意味のない舞樂を続けなければいけない現状に、ほとほと嫌気がさしているんです。」

長喜は怒りを通り越して呆れを覚えてきた。いや、もう呆れも通り越している。だんだんと、笑えてきている。自分を出したいなどといっておきながら、こいつの言っていることは長喜がこれまでたくさん見てきた絵師くずれの若者と些かも異なるところがない。でも、こういう奴を諭して、正しい方向に導いてやるのが先輩絵師としての自分の使命だろう。長喜は自分も若い頃はこんな奴だったかもしれないと思いついて、できるだけ怒りを押し殺すようにしゃべり始めた。

「写楽。じゃあお前は、自分が好き勝手に描いた絵が人様に売れて、それで生計を立てるほどの絵師になりたいということか。」

長喜のこめかみにはびくびくと青筋が浮かんでいた。長喜は全く自分の怒りを隠せてはいなかったが、写楽の勘の悪さからすると気付かないだろうと思えた。

写楽はというと、頷きもせず遠い目をしていて。ここで開き直って頷いてくれた方がまだ救いようがあるのだが、そうでもないらしい。頷けないのは、

自分が目指しているものがいかに虫のいい存在かというのに薄々感付いているからだろう。だとすれば、まだ望みはあるとも言えるのか。

長喜はこめかみに管を浮かべたまま、ゆっくりと話し始めた。

「いいか。そんな奴は、この業界にはおらん。版画を生業としている絵師だつて、買ってくれるお客様がいるから生業になつているんだ。お客様が絵を買ってくれるのは、商品を見ていいものだと思つたからだ。売れる絵つていうのは、絵師が描きたいものじゃなくて、お客様がいいと思つてくれる絵なんだ。だから、絵を描くときには、自分が楽しいかどうかじゃなくて、お客様が楽しんでくれるかどうかを考える必要があるんだ。」

喋っているうちに、こんなことから教えなくてはならないことが少し馬鹿馬鹿しく、それでも悲しく思えてきた。でも、ここで諦めたら、隣に座っているアホウは一生アホウのまま死んでいくだろう。

「でも自分の描きたいものを描いて、それが売れる人もいるじゃないですか。来たな、という感想しか長喜には湧いてこなかった。この手の世間知らずが出してくる典型的な反論の一つである。」

「それは、ごくごく一部の例外だ。その背後に、自分の描きたいものだけ描かなかつたから世に出ずにうらぶれた何千何万という屍が累々と積み重なっているのだ。自分の描きたいものだけ描きたいんだつたら、一生世に出ないかもしれない、と覚悟しないとけない。当然、生活は成り立たないだろうから、副業としてやる方が安全だろうな。」

長喜がここまで言い切ると、写楽はまだ黙りこくってしまった。間を保たせるために、長喜は一人でしゃべり続けた。

「大丈夫だ写楽。お前さんには才能がある。少なくとも俺はそう睨んでいる。まずは自分の描きたいものを封印して売れる絵を描き、名前が世に知られた後に自分のやりたいことを始めるという形でもいいではないか。」

「自分を殺せというのなら、今の生活と偉く変わりないではないですか…。」
写楽がぼそりと呟いた。目には、涙が浮かんでいるようにさえ見えた。

長喜は小さくなった写楽を見て若い頃の自分をまた思い出した。自分にも、確かにこんな青臭い時代があったのだ。というより、写楽の絵に自分の若い頃

と似た青臭さを見て取ったからこそ、ここまでこの男に執心していたのではなかったか。

そんなことを考えていると、長喜は二の句が継げなくなっていた。蔦屋みたいな異常者なら、ここで良心の呵責を覚えることなく写楽を叱責し続けることができたかもしれない。

「伊藤若冲という絵描きを御存知ですか？」

暫時の沈黙を破って先に口を開いたのは、意外にも写楽だった。

「若冲ね。俺も風の噂でしか聞いたことがない。京の絵描きだっけか？」

「彼は、実家が京のかい八百屋だそうです。その八百屋を継いだ後、不惑で早々に引退して店を息子に譲り、その後は実家の豊富な資産に生活を支えられながら、絵を描き放題だったそうです。阿蘭陀からしか入ってこないような高価な画材も、使い放題だったとか。」

「ま、それは確かに羨ましい生活だな。でも、残念ながら俺らにはそういう金がない。」

「若冲にはそういう生活ができて、我々にはできないというのは、実に不平等だとは思いませんか。」

長喜は目をつむった。そういうところにまで考えが及んでしまうと、人間、帰ってくるのはなかなか難しいものである。

「あのような写楽。若冲っていうのは、確かに自分の好きな絵を描いているだけの生活かも知れないが、それだけだぞ。自分のやりたいことを優先しているから、全然世間様から認められてねえ。現に、俺やお前みたいなこの業界に関わりのある人間に、ちよつと名前が知られてるだけじゃねえか。それでもいいのか。」

写楽は、すつと立ち上がって一歩前に出た。その背中が、震えていた。どうやら、嫌なようだった。

「これは俺も風の噂で聞いていることだが、若冲は『千年後に自分を分かる人間が出てくればいい』だなんて公言しているそうだぞ。それはそれで、非常に辛いことじゃないか？　そこまでの覚悟がお前にあるのか？」

写楽の背中が、まだ震えている。震えは一層小刻みになってきた。

こいつは、自分の描きたい絵だけを描いて、それで名声と富の両方を得たいということを行っているのである。出発点からして矛盾を孕んでいる脆さが長喜にはどこか新鮮だったが、よく考えればそうでもなかった。藝で身を立てようとしている若者が押しなべて抱えている矛盾だろう。自分も、こんな痛々しい感じだったのだ。若い頃の自分も周囲には今の写楽みたいに映っていたかもしれないのだ。そこまで考えると、今度は自分の胸が痛くなってきた。若者には、優しく接してやるべきだろう。自分が若者だった頃も、周囲は優しく接してくれていたのだ。

長喜は切り刻まれそうな心の臓を押えながら、ゆっくりと立ち上がった。

「そういえば写楽、おまえいくつなんだ？」

「三十になりました。」

長喜の脳天に、この日最後の鉄塊が空の彼方から落ちてきた。もう、若者ではないではないか。

三十という年齢を恥ずかしげもなく答える写楽の済んだ瞳が、長喜の丹田に深々と刺さってきた。

五

「結局、私がそいつの面倒を見ることが何の得になるんですか。」

蔦屋はいつにも増して不機嫌そうだった。

「まあ、蔦重も商売人なんだからもつと長い目で見て欲しいな。」

長喜は、蔦屋の眉間に寄った皺を眺めながら、意識して相好を崩した。

「商売人なんだからこそ、すぐ儲けさせてくれる話にしか乗らないんですよ。」

「そんな切羽詰まった状況でもないだろうに。もう金があるからこそ、長い目で見た勝負もできるんだろう。」

「何を仰るんですか。金なんてあるわけないでしょう。」

「嘘をつけ。歌麿や南畝先生や京伝なんぼで散々儲けただろうに……」

ここまで言って長喜ははっと我に返った。蔦屋を見ると、さっきの不機嫌な表情が顔面に留められていた。

葛屋は両の鼻から大きくため息を出した後、積み上げられた版下絵を眺めながらゆつくりと言葉を紡いだ。

「版画は絵師じゃなくて彫師の作品だなんて抜かす三十男が売れるわけがないでしょう。どうせわけの分からん絵を描いて、尾羽打ち枯らすだけに決まっています。」

「そんな三十男を、葛重さまさまの弁で改心させて欲しいのだ。儂みたいな三流絵師が言っても説得力がない。」

「その類の手合いは『絵を描いたこともない奴に何が分かる』とか言って版元のことも馬鹿にしますよ。長喜先生に言ってもらった方がまだ耳を傾けると思いますがね。」

凶星だった。

長喜は、反論の言葉を探しながら腕を組んだが、何も出てこなかった。

とはいえ葛屋のこの鋭利さをぶつけてみないことには、今の写楽は誰にも知られずにひっそりと死んでしまうだろう。

「まあまあ、騙されたと思って一回会って話をしてくれないかね。」

「どうやって会うんですか？ 私にそいつの家に行けというんですか？」

「大丈夫だ。もう呼んである。」

長喜が手を打つと、襖がガラツと開いた。奥には、版下絵らしきものを食いつけるように見つめている写楽がいた。

葛屋は、長喜の手際の良さに辟易して口をへの字に曲げた。

「おい。」

葛屋が声を発したが、写楽はびくりとも動かなかった。

「おい。」

「何だ？ 俺に言ってるのか？」

葛屋の真向かいにいた長喜が反応した。

「こや……」

葛屋はいったん口ごもったが、すぐにまた口を開いた。

「あんまり長い間握らせないでください。」

葛屋は、長喜に言っていた。

「何をだ？ 版下絵か？」

「そうです。一応売り物ですから。」

「売り物だったってあれを元に版木を作るわけだから、あれそのものを売るわけじゃねえだろう。」

「とつときやあ売れるかも知れないじゃないですか。歌麿のとかは大人気なんですから。」

「直接写楽に言えよ。」

「聞こえてる様子がないから先生に申し上げているんじゃないですか。」

「分かった分かった。」

長喜はいかにも面倒な様子で腰を上げた。

「ま、お前さんも版下絵を見てるときはあれぐらい強く握ってるぞ。俺だって破られないかどうか心配なぐらいなんだ。」

蔦屋には、長喜の言葉が耳に入っている様子はなかった。

「お前さん……、何かこういう絵を描きたいというのはあるんですか？」

長い沈黙を破って、蔦屋が口火を切った。

長喜はとつくにどこかに行ってしまった。恐らく、二人の視界に入らないだけで、どこかでこの会話を聞いているのだろう。

「私が描きたい絵は……この世の本質を照らし出すような絵です。」

写楽の目と頬は煌々と輝いていた。耳朶も棗のように紅潮している。自分の発言に全く疑問を抱いていない証左である。

ダメである。全くもつてダメである。

蔦屋は俯いて、目を強く瞑った。こういう抽象的なことしか言えない奴は、中身がないから抽象的なことしか言えないのだ。

商売は、客に商品を買ってもらうために、商品の良さを伝える努力をしなければならぬ。いくら良いものであっても、良さが伝わらなければ売れないのである。ものの良さに胡坐をかいてはいけない。「ものさえよければ自然と売れるだろう」なんてのは、宣伝をサボるための言い訳である。

いま、目の前にいる三十男は、自分を俺に売り込む立場にいるはずである。

でも、それを一切しようとしていない。自分によほど自信があるのか、それともよほどの阿呆なのか。恐らく、両方だろう。

そんなことを考えていたら、また長い沈黙が流れていた。葛屋は強く瞑っていた目を開けて、写楽を見た。瞼に力をかけすぎていたせいで、視界には目やにのような色の靄がかかっていた。

「斎藤さん……と言ったかな？」

葛屋は努めて冷静を装った。

「できれば写楽と呼んでもらえるとありがたいです。」

写楽は、明るくはにかんでいた。

「では写楽さん。いまこの江戸で売れている絵がどういうものかはご存知ですか。」

「色々、あるのではないでしょうか。歌舞伎の役者絵とか、美人画とか、名所絵とか。」

「役者絵。美人画。名所絵。その通りです。全部よく売れる。でも、一番ではない。一番売れるのは、春画なんです。」

「春画。」

写楽の眉が曇った。その曇りを隠そうともしない無頓着さが、葛屋の癪に障った。

「写楽さんは、耕才志才にはたくさんご投稿をいただきましたが、本職の絵師としては無名の新人絵師です。まずは、売れる絵を描いて名前を売っていくところから始めていただかないといけません。春画をお描きになるつもりは、ありますか。」

「春画ですかあ……。」

「うちの歌麿も、あなたをここに連れてきた長喜先生も、売れないうちはたくさんたくさん春画を描いていました。歌麿の春画なんか、飛ぶように売れたもんです。北斎先生……ええと今の号はなんだったかな？ 長喜先生。聞いてるんでしょ。」

「儂も知らん。」

長喜の声は、床下とも天井ともつかぬ位置から響いてきた。

「まあ、じゃあ北齋先生でいいでしょう。北齋先生だって春画をたくさん描いているんです。」

「私は一応武士なので、そういうのは……」
そう言いつつも、写楽の台詞回しは歯切れが悪かった。武士の身分だということや理由にするのであれば、そもそも浮世絵なんか描けないはずである。きつと春画を藝術性に一段劣る実用品かなんかだと思っているのだろう。その気障が、蔦屋には嫌だった。

「まあ、武士ということであれば無理にとは言いません。今は武士の皆様も大変なご時世ですから。白河侯が老中になられてから、大変でしょう。南畝なんぼ先生も会うたびに愚痴をこぼしてますよ。」

長喜は、蔦屋がここまで武士に気を使った台詞を言っていることに感心していた。嫌味を、隠し切れてはいなかったが。

「いえまあ：私の口から御公儀を悪し様に言うようなことは……」
「ええそうですね。じゃあもう少し露骨さを減らして、美人画みたいなものはどうですか？ これも、売れるんですよ。」

「美人画では、歌麿先生に勝てるとは思えませんので……。」
自分の描きたいものが描きたいだけであれば、他の絵師に勝つとか負けるとかはどうでもいいことではないのだろうか。蔦屋は、写楽も結局世俗の名望を気にしているように思えてならなかった。そのことが予想通りでもありつつ、残念でもあった。

「写楽さん。ではあなたの描きたいものをもう少し具体的にお話しいただいた方が早いですかね。」

「私が描きたいのは、世の本質を映し出す鏡のような絵です。」
写楽はさつきと同じことを恥ずかしげもなく言い放った。自分の喋りたいことになると、それまでの話の流れは関係なしに臆せず声を出せるようだった。「すみません。それがどうもピンと来ないのですが、人物画かそうでないかというどちらですか。」

「その二択だと、人物画ですね。耕才志才に送っていたのもほとんど人物画だ

ったと思います。」

「それでも春画や美人画はしつくり来ないのでしょう。」

「ええ。」

「となると、江戸の庶民に売れる絵であれば、役者絵や相撲絵になってしましますが……」

「その中だと、役者絵が一番近いかなあとという気がするんですが……。」

「ほほう。ならば歌舞伎を見に行ってもらって、人気役者の肖像を描いてもらうことになりますよ。役者絵で世の本質を映し出すというのは、どういうことなんですか？」

「……。」

ここで写楽が言いよんだ。今まで自分の喋りたいことをしゃべっていたのに急に押し黙るのは、多分自分でも考えが整理できていないからなのだろう。

「すみません。能役者の写楽さんにこんなことを聞くのは釈迦に説法かも知れませんが……。」

「いえ、能と歌舞伎は全然違うものですから……。」

写楽は、右の拳を顎に当てている。まだ、適切な言葉を探している様子だった。

「歌舞伎は、江戸の民衆に大人気の娯楽ですよね。」

先に口を開いたのは、写楽だった。

「そうです。だからお客さんそれぞれに鼻唄の役者がいる。鼻唄の役者がいるからこそ、絵も売れる。」

「私も、武士の分際でお恥ずかしい話ですが、一度だけ見たことがあります。もうだいぶ小さい頃だったので詳しいことはほとんど覚えていないのですが、仇討の話だったと記憶しています。」

「いえいえいえ、高貴な身分にありながら我ら庶人に接することを忘れない謙虚さには、頭が下がる思いです。」

長喜は鳶屋の台詞を聞きながら間違えて鼻くそを口に入れてしまった時のような表情で口を半開きにしていた。本心にないことをここまで堂々と臆面もなく言っただけのこの親父はやはり、根っからの商売人なのである。

「そこで歌舞伎を見て思ったのですが、あれは女性も男の役者がやっているじゃないですか。」

「女形おやまというやつですな。」

「そこでまだ頑是ない砌の小写楽は思ったのです。芝居というのは、嘘で成り立っている世界なんだな、と。」

「まあ、そういうものでしょう。」

「その嘘を暴いてやるような絵を描いてやりたいと思います。」

「どういうことですかそれは。」

「例えば、女形の役者は、所作の一つ一つは実に女らしいのですが、顔をよく見るとやっぱりどう見ても男なんですな。でも世に出回っている役者絵を見ると、きちんと美人画に匹敵するような美人に描かれている。」

「それは、の方が売れるからですよ。誰しも最良の役者が格好良く描いてあった方が嬉しいでしょうに。」

「それではお客さんは騙されたままです。私は、その女形の役者が本当は男だと分かるような絵を正確に描いてやりたい。お客さんの目を覚ましてやりたい。」

「ああ。それはいけませんや。」

蔦屋の語調は変わらなかったが、部屋の空気はピンと張り詰めた。長喜には、はつきりと分かった。何かが、蔦屋の琴線に触れたらしかった。別の空間にいた長喜さえ、言いようのない恐怖に慄いた。

「いいですか。我々は嘘を売っているんです。歌舞伎役者も我々も、嘘を売っているんです。お客さんも、嘘を買っているんです。」

「それが不健全なことだとは思いませんか？」

写楽も、引き下がらなかった。

写楽本人は、持ち前の無頓着さで蔦屋の触れてはいけないところに触れたことに気付いていないだけかもしれないが、意地を張っているようにも思えた。長喜には、どちらかははつきりと分からなかった。

他方で長喜は、自分の胸の鼓動が次第に大きく強くなっていくのをはつきり

と感じ取った。このまま写楽をのさばらせておくと、蔦屋が切れてしまうかもしれない。

「いいですか。現実というのは非情です。親を殺されても自分に力も腕もないから泣き寝入りするしかないのが現実です。そんなやるせなさをしばし忘れさせてくれるのが、歌舞伎なのです。歌舞伎は嘘です。嘘ですが、嘘だからこそ現実とは違うのです。現実とは違ってしっかりと仇討ちを成し遂げられるから、人は感動して溜飲を下げるのです。そのために、人はみなお金を払っているのです。それをわれわれの側から『あなたの見ているものは嘘なんだよ』なんて暴露するのは禁じ手です。自分の売っている商品を貶す商人がどこにいますか。そういうのは、『藪蛇』というのですよ。」

「……………」

写楽は、黙りこくってしまった。蔦屋の静かな迫力に、気圧されたようだった。

「やはり、写楽さんの目指すところとうちで扱っている商品とは根本的な部分で違いがあるようです。お引き取りいただいた方が、お互いにとって良いでしょうな……………」

六

「おい。こっちだこっち。」

写楽は、時間ぎりぎりにやってきた。いつもの野暮ったい羽織に身を包んでいる。長喜を見つけると、うつむき加減になって走り出した。

「困ります先生。あまり大きな声を出さないでください。こんな人が多くちゃあ、誰に見られるか分かったもんでありません。」

「大丈夫だ。これでも全盛期と比べりゃあ、相当減ってるぞ。」

長喜は街行く人々を見渡した。確かに、もつと昔はこの小路に人がそれぞれ押し寿司のように積み重なって、身動きが取れなかったものである。その時分に比べれば、人影はだいぶまばらである。召し物も、全体的に地味になっている。

「白河侯の締め付けはこんなところにも響いているってわけだ。都座も客足がみやこぎ遠のいて経営が大変みたいだぞ。」

「滅多なことを言わない方がいいですよ。どこに監視の目が光っているか分かりません。」

「そんなところに使う金があるんだったら他のところに回せよなあ。」

「だから！」

写樂はずっと顔を赤くして困ったような表情をしていた。がに股で堂々と歩く長喜の横で、袖を振り乱しながらおろおろしている。

「そんなアタフタするな。余計目立つだろ。あと俺も申し訳なくなるじゃないか。」

「先生が無理に誘ったんじゃないですか。」

「最終的に来たのはお前だろう。」

「それはそうですが……」

「いいのか。この時分に武士が歌舞伎なんか見て。」

「だから……」

「ほら。もう着いたぞ。」

長喜が指差した先に、都座があつた。きらびやかな灯火の下で、原色を身に纏った男女が、ずるずると中に吸い込まれていた。

「むちやくちや近いすな。耕書堂から。」

「そらそうよ。ズブズブだからな。芝居が当たれば絵が売れる。絵が売れば更に芝居に客が入る、という寸法だ。」

長喜は、慣れた様子でその男女の中に混じっていった。写樂は人ごみではぐれまいと必死に長喜の後を追った。

「流石、先生は慣れてますね。」

「俺もここに来るのは久しぶりだ。役者絵はほとんど描かねえからな。」

「その割には迷いのない歩調すな。」

「こんなところでオドオドしてもしょうがねえだろう。俺たちは客なんだ。どんなに偉そうにしても丁重に扱われる身だぞ。」

長喜が受付の係員らしき男と何やら話すと、人ごみの大流とは違う方向へと案内された。写楽は田舎者のように辺りをきよろきよろ見回しながら、長喜の背中を追っていった。

「そういえば、今日のお代はどうなるんですか。」

「お前そういうことを入ってから聞くなよ。どうせおごられる前提で来たんだろう。」

「えっ……」

写楽が黙って立ち尽くしてしまった。こういう純朴さが、長喜は好きでも嫌いでもあった。

「大丈夫だ。俺らは今日絵師席に入るから、お代は要らん。強いて言えば蔦屋のおごりだな。」

「なんだ。良かったです。」

「お前まさか本当に金を持ってきてなかったのか？」

「はい。ちよつとしか……。」

「気を付けろよ。俺がお前におごるわけないんだからな」

「はあ……」

返事に困っている様子の写楽を尻目に長喜はどつかと絵師席に腰を下ろした。舞台の全景を見渡せる、特等席である。下からは、これからの演目に期待して胸躍らせる一般客の喧騒が活気よく響いてくる。

「ははあ……こりやあいい場所ですね。」

「だろう。こういうのを役得と言うんだ。」

長喜は傍らに用意されていたあられを手にとって口に運び、バリバリと下品に頬張っていた。

「で、だ。」

「はあ。」

ニコリと笑った長喜の歯は、汚かった。

「もう一度言うておくが、お前さんが今日タダで歌舞伎を見ることができるのは、絵を描くからだ。この席に座るからには、絵を描いてもらわにやあならん。」

「はい。それは分かっています。」

力強く断言する写楽は、紙も筆も顔料も持っている様子になかった。

「お前、何も持たずにどうやって絵を描くんのだ。」

「あ、私はこれだと思つた情景を後で思い出しながら描く手合いなので。」

「なんだ。歌麿と一緒にだな。」

「はあ。歌麿先生もそうなんですか。」

「お前ら、よくそんなやり方で絵が描けるよな。俺みたいな凡人は、描く物を見ながらじゃないと描けないからな。」

「いえ何を…」

「お前といい歌麿といい、そういう描き方ができる奴は人としての能力がどこか猛烈に凹んでいる天才肌ばかりだな。」

「はあ……」

猛烈に凹んでいると言われたのが堪えたのかただ単に返事に困っただけだったのかは分からなかったが、写楽はまた押し黙ってしまった。本当に堪えたのだとしたら、写楽も普通の人らしいところがあるものである。長喜はすぐに考えるのをやめて、あられを頬張り続けた。下の席からは相変わらず威勢の良い笑い声が響いてくる。

「歌麿先生は……」

「ん？」

俯いて押し黙った写楽が口を開いた。

「どうした。」

「歌麿先生は、どういうところが凹んでいるんですか。」

「ああ。それはちよつと付き合えば分かるぞ。あいつは女の絵ばかり描いている変態だが、描く女をこれでもかというぐらいねめ回すんだ。見られてる女が気の毒になるぐらい、ねめ回すんだ。ありやあ、はたで見ていると辛くなるぞ。」

「はあ……」

「アレは多分、襦袢の下の柔肌まで見通そうとしているんだな。あの変態は、そういう出歯亀みたいな根性の持ち主だから。あるいは、柔肌の下の肉にま

で視線を貫かせようとしているのかもしれない。そうなるともう完全な変態だな。」

「はあ……。」

長喜は、自分の発言が単なる悪口になっていると気が付いた。まあでも、こんなもんだらう。歌麿から画力を取り去るといつしよっぴかれてもおかしくない出歯亀でしかなくなってしまうのは事実なのだ。

長喜が手を伸ばすと、あらはもうなくなっていた。開演まで、あとどれくらいだろうか。

写楽の頬は、明らかに紅潮していた。

「どうだ。いいもんだらう歌舞伎つてのは。」

「……………」

写楽は頬を染めたまま答えなかった。おそらく、嘘をつくのが苦手なのだろう。

「お待ち。」

屋台の親父が、かけそばを二つ出してきた。

写楽は何も言わずに、勢いよく麺をすすり始めたかと思うと、やにわに長喜の方に向き直った。

「少し、語らせてもらっていいですか。」

向き直った写楽の目は、据わっていた。一滴も酒を飲んでいないのに、何で酔っ払ったような感じになっているのだろうか。

長喜は、芝居に酔ったんだらうな、と言いかけてすんでのところで思いとどまった。

「圓鏡えんきょうという人がいたでしょう。耕才志才えんきょうの常連に。」

写楽は長喜の葛藤を知る由もなく、勝手にしゃべり始めた。声の調子も普段より不躑でぶつきらぼうだったので、長喜はますます目の前の小男が酔っ払っているような印象を受けた。

「ああ。いたな。圓鏡。」

長喜は適当に返事をしながら井に浮かんでいた蒲鉾を口に運んだが、思ったより熱かったので吐き出してしまった。

それにしても、なぜ歌舞伎じゃなくて圓鏡の話からなのだろうか。多分、話がヘタなのだろう。

「あの圓鏡という人は、歌舞伎役者の絵をたくさん描いていたんです。」

「まあ、確かにそうだな。画風もお前と結構似ていたと思うが。」

「そうですか？ まあそれはいいとして。」

写楽は、とにかく自分の言いたいことを言っつけてしまいたいようだった。長喜から茶々を入れても、にべもなく切り捨てられるだけだろうと思われた。

「私は圓鏡さんの画力は認めていたんです。それなのに、なんで歌舞伎役者みたいなものに材をとるのがずっと分からなかった。でも今日、ようやく分かりました。」

「ほほう。そんなにいいものだったか。」

「そういうことです。」

蓋を開けてみれば大した話ではなかったが、長喜は歌舞伎がこんなにも写楽に響いたことが嬉しかった。

「もう、見る方のことを無視して黴臭い伝統だけを護り続けている能なんかとはえらい違いです。芝居をやるなら、こうでなくてはいけません。」

「まあ、お前も絵を描くならこうでないといけないんだけどな。」

「そうなんです。」

写楽が興奮しているこの絶好機に長喜は蔦屋の教えを刷り込もうと思ったが、右から左に抜けたようだった。

長喜は諦めて、とりあえず歌舞伎の話が続けさせてみることにした。

「何か、印象に残った場面とか役者とかはあるのか」

「アレですなアレ。あの、庄屋。」

「庄屋？」

「いたじゃないですか。中盤で主人公一行を匿う庄屋が。」

長喜も写楽も、歌舞伎の演目や役者には全くもって詳しくない。そのため長喜はいまの写楽との会話がひどく低級なものに思えてならなかったが、恥をぐ

つと飲み込んでさつき見た芝居の内容を思い出した。庄屋なんぞ、出ていたかどうか。

「その庄屋って、舞台には何回出てきたっけか。」

「一回ですよ。その一回。主人公一行を逃がしたら悪党に切られて死んでたじゃないですか。」

「それじゃあ、チョイ役じゃないか。」

「いや、そういうところにこそ、言いようのない悲劇性が詰まっているものです。」

長喜は、そばの汁を一口すすった。この男は、本気で庄屋が一番好きだと言っているのだろうか。変人を装うためにわざと人とは違うところに張っているのではないだろうか。まあ、どっちにしても、同じことか。

「まだはつきり思い出せないが、じゃあお前は帰って誰の絵を描くんだ？」

「庄屋ですよ。庄屋が追っ手の悪党に立ち向かうために、覚悟を決めて匕首を取り出そうと懐に手を忍ばせた瞬間ですね。もう、情景がありありと浮かびます。ここには、どうしようもない理不尽に対峙する人間の、現実があります。」

やはり、蔦屋の言ったことは全然耳に入っていないようだった。そんなチョイ役の絵など、描いたとしても売れるわけがないだろう。

長喜は今この瞬間に蔦屋のような講釈を垂れることもできたが、一度写楽に好き勝手やらせてみたい気持ちの方が強かった。

「まあ、いいや。とりあえずお前のやりたいようにやってみろ。できたら、持ってきな。色はつけなくてもいいから。」

「はい。」

写楽は麵を食べ尽くし、もう汁を飲み干そうとしていた。長喜は再び蒲鉾に口を含んだが、まだ熱かった。

「吉原でも行くか？」

「行きませんよ。」

「ダメに決まってるでしょうこんなもん。」

鳶屋の返事はにべもなかった。畳には、写楽が描いてきた庄屋の絵が三枚も並べられていた。

「一枚で良かったのに三枚も描いてきたんだぞ。それに白黒の線画だけでいいって念を押したのに、全部色をつけてきやがった。しかも、一週間もかかってないぞ。」

「それは確かに早いです。長喜先生なら、白黒の版下絵一枚で二ヶ月かかるのに。」

「そうだろうそうだろう。俺をクビにしても雇いたいだろう。写楽を。」

「それは違います。写楽が私の指定した題材を間違はなく描いてくれるってんならこの速筆は紛れもない武器ですが、そうじゃないでしょう？ 奴は、自分の描きたいものしか描かないでしょうし、そういう奴は自分の描きたいもの以外ではこんなに早く絵が描けないはずですよ。」

鳶屋の言っていることは、恐らく正しかった。長喜は目をつむって頭をゆっくり振りながら反論を探した。

「でも、世の中の本質がどうのこうの言ってた奴が役者絵を描いてきたんだから。こんなに迫力のある役者絵を。歌舞伎を見てる奴は楽しそうだったぞう……。」

「こんな端役楽しさを見出すような奴が絵師では困るんですよ。」

鳶屋は並べてあった三枚の絵を手の甲で叩いた。

長喜は、改めて描かれている庄屋を見た。乱れて風に靡くもみあげ、への字に結んだ口、焦点の定まらない黒目、そして懐に忍ばせた右手の細かい皺。全体に漂う今にも泣き出しそうな悲壮感は、これまでの絵師にはなかった迫力と跳躍力を持っている。

「こんな絵、写楽以外の誰にも描けないと思うけどなあ。雲母摺りとかにしたらこの悲壮感が一層映えるだろうなあ……。」

「雲母きらは高いんです。売れない絵にそんな金をかけるわけにはいきません。」

「でも雲母摺りがいいってのは納得できるだろ？」

葛屋は一瞬口をつぐんで、庄屋の絵の一枚を手にとってから、至近距離でまじまじと見つめた。

「……まあ確かに、こういう悲愴な感じの絵には黒っぽい背景が似合うのは確かです。」

「ようし。じゃあ背景も決まりだ。彫師と摺師はどうすんだ。」

「だからやらないって言ってるじゃないですか。」

葛屋は手に取った写楽の絵を投げ捨てるように畳に放った。

「この庄屋の演目はあれですよ。もう題名は忘れたけど、仇討の話。」

「そうだ。よく知ってるな。」

「ずっとこの商売やってますからね。」

葛屋の顔には、得意げな表情は少しも出ていなかった。

「その話には、主役にも敵役にももつときれいどころがたくさん出ていたはずです。女形にも人気出そうなのがたくさんいました。」

「そうだそうだ。」

「その中で、なぜこんな端役の絵を描いたのだったという話です。」

「それは俺も本人に聞いたんだが、よく分からなかったな。」

「分からない？　なんて言ってたんですか本人は。」

「なんか、悲愴な感じで悪党と対峙して最終的に殺されてしまう庄屋にこそ、生の現実があるみたいなのを言ってたな。」

「それはそのまんまの意味でしょうな。」

葛屋は腕を組んだ。

「現実世界じゃあ仇討なんか成功しないんです。そもそも相手が見つからないでしょうし、見つかったとしても敵は悪党だから返り討ちにあってもおかしくないです。だから、仇討が成功してしまう歌舞伎の世界は、嘘なんです。そういう嘘を描くんじゃなくて、現実を見せてやりたいってことなんですよ？」

「まあ、多分そういうことだろうなあ。」

長喜も、腕を組みながら俯いた。

「それじゃあやっぱりうちで版画を作るってのはお門違いってもんです。役者

絵を描くんだったら、売れる絵を描いてもらわにやあなりません。売れる絵が何かって言えば、やっぱり人気のある役柄の絵であって、それは普通主役や二枚目の絵なんです。」

「それは、俺は分かってるよ。」

「じゃあこんな絵をここまで持ってくるなという話です。」

長喜は、ここで二の句が継げなくなってしまうた。蔦屋の言っていることは痛いほどの正論だった。

もう、最後の手を使うしかなかった。

耕書堂の裏口で待っていた写楽は、氷雨が降っているというのにはしやいでいた。歌舞伎を見た後の時のように、頬を紅く染めている。

長喜はのんきな様子の写楽に少し腹が立ったが、自分のその苛立ちも理不尽なものだとすぐに気が付いて、極力笑顔を自分の顔面に貼りつけようとした。

「どうした写楽。やけに楽しそうじゃないか。」

「いま南畝先生なんぼがここを通っていったんですよ。いやあ初めて見た。」

写楽は、声まで上ずっていた。

「お前、南畝先生の顔を見たことあるのか？」

「ないですけど、お付きの人から『南畝先生』って呼ばれてたから分かりました。えらいもんで、あれが南畝先生だと分かった瞬間に背中から気のようなものが放出されて私を圧倒してきましたんですよ。」

「ま、そういうもんは見る方の心の持ちようだってことだな。」

長喜はだんだんとうんざりとしてきた。生の現実を描きたいと尖った錐のようなことを言っていた爆弾魔は、大田南畝を見ただけで破裂せんばかりに欣喜雀躍しているのである。一言でいうならば目の前の男は「世俗的な仙人」である。それで分かりにくければ、火鉢に放り込まれた雪玉のようなものである。自分が内包する矛盾に気が付かないのは、底抜けの阿呆であるからに違いあるまい。

「やっぱりここは色々なものがあるし、色々な人がいますねえ。この前来た時

に歌麿先生の版下絵を見られたのも衝撃的だったし、今日は南畝先生を直に見ることができたし……。」

「なあ、写楽。」

興奮冷めやらぬ様子の写楽を制するように、長喜は稲光のような声を発した。氷雨が、頬に鋭く刺さっていた。

「ここまで俺の我俣に付き合ってもらっていたわけだが、迷惑か？ お前は、何がしたいんだ。」

長喜も、半ば自暴自棄になっていた。

「長喜先生には申し上げました。私は絵で、画業で身を立てたい。」

「身を立てるってのはどういうことだ。」

「江戸中に名前を知らしめたい……というのが最終的なところですが、そこまですで贅沢は言いません。絵を描いているだけで飯を食べていければ結構です。」

「どんな絵を描くんだ。」

「私の描きたい絵は今日持ってきた三枚がそれぞれそのものです。世を映し出す鏡のような絵を描きたいのです。」

「そういう絵は、売れんぞ。そういう絵を描いているうちは画業だけで食っていくのは無理だ。お前の言うことは、水には入りたいが濡れたくないと言うのに等しい。矛盾している。」

「贅沢なことを言っているつもりはありますが、矛盾しているとは毛頭思っていないません。自分のやりたいことだけをやって大成できた人は、ごく僅かだとしてもいるはずです。皆無ではありません。ならば、望みとして持つのは間違いではないと思います。」

写楽の黒目は、大きくなっていった。その黒には、一点の濁りも曇りもなかった。

「分かった。ならやはり俺はお門違いだったようだ。ここの親分の考え方はこの前聞いた通りだ。奴は商人で、ここは商店なんだ。奴が取り扱うのは売れる絵と、売れる絵を描く絵師だけだ。お前の絵は、どんなにうまくても売れないんだ。だから、ここでいくら頑張っても、お前の絵を商品として取り扱ってくれることはない。だから、お前の夢をかなえたいんだったら、他を当

たってくれ。」

写楽は、ニコニコした表情のままだった。長喜の言ったことがそもそも耳に入っていないのか、耳には入ったけど理解できなかったのか、理解したうえで笑っているのか。

「確かにお前を無理矢理ここまで連れ出したのは俺だ。それなのにこういう形で終わらせるのは、申し訳ないとも思っている…。」

「長喜先生。」

写楽が笑みを浮かべたまま長喜の話を遮った。

「何が…、仰りたいんですか。」

長喜は目を閉じて嘆息した。それを、いま言おうとしているのになぜ邪魔をしてくるのだろうか。長喜が両の鼻から出そうと思っただけのため息は、右の鼻からしか出てこなかった。

「いいか。確かに嫌がるお前を無理に鳶屋と引き合わせ、歌舞伎まで見せたのは俺だ。でもな、そこまでやったのは、お前が売りたい気持ちを持っていると思っただからだ。自分の絵を細々と描いているだけで終わりたくないからこそ、最終的には鳶屋にも会ったし、歌舞伎も見に来たんだろう。俺は、お前の奥底には『売りたい』という気持ちがあると思っている。でも、それにしちゃあちよつと非協力的すぎないか？ 何が庄屋だ。何が『現実を見せる』だ。あんな絵、売れるわけないだろう。あんな絵しか描けないんなら、もう鳶屋にしがみつきこうとするのはやめてくれないか。やりたいことがあるんだったら、自分でやってくれればいい。鳶屋とお前とを会わせたいのは俺だ。そこは、責任を感じている。でも、お前に売りたい気持ちがあるんだったら、もう少し協力的になってくれてもいいんじゃないか？ その気持ちがないんだったら、もうやめにしよう。俺がお前を見誤ったってことだ。売れるつもりもないのに、無理矢理引きずり出して悪かった。売るつもりで描いたわけではない絵に対して、『こんなもん売れるわけがない』なんて的外れな論評をして悪かった。でもま、そういうことだ。もうそういう段階にまで問題は煮詰まってるんだ。」

「分かりました。」

写楽はにこにこした表情を崩さなかった。

「帰ります。」

写楽は長喜にくるりと背を向けて、氷雨の降りしきる雑踏に繰り出していった。

「え？ おい写楽！」

長喜は大きな声を出したつもりだったが、喉が絞られていたせいかほとんど声になっっていなかった。

「おい写楽！ 写楽！ そうじゃねえだろう！ やる気がないなら帰れと言われて帰る奴があるか！ 写楽！」

少しずつ小さくなる写楽の野暮ったい背中は、振り子のように左右に揺れていた。

さすがに武家屋敷である。塀は高く立派だった。

長喜は眼前に立ち塞がる徳島藩邸を、墨汁を吸わせた筆のようにゆっくりと睥睨した。このままここに立っただけでも、中の人間が出てきて追い払われるだけだろうと思われた。

あの時写楽と喧嘩別れしてから、もうどれくらい経っただろうか。耕才志才にも写楽は絵を持って来なくなった。そうになると、奴に会うためにはもう家を直接訪れるよりない。

長喜は、生半可な決意で来たことを後悔していた。目の前の大名屋敷が与える威容は相当なものである。まさか勝手に中に入るわけにもいかないし、写楽が出てくるまで外で待っているのも辛い。

長喜は素直に諦めて踵を返した。別に、そこまで急ぐ必要もないだろう。

少し距離をとってから、長喜は後ろを振り返った。徳島藩邸が抱える威容は若干薄らいでいた。

「いかんいかん。写楽にも言ったじゃねえか。こういうのは気の持ちようなんだ。相手が殺気や威圧感を出しているんじゃない。自分で勝手に怯えているだけなんだ。」

刹那、長喜の脇を見覚えのある野暮ったい羽織が通り過ぎようとした。長喜

は、振り返りながらその尻を思い切り蹴り上げた。羽織は、ガサガサと音を立てながら地面に押し付けられていった。

「久しぶりだな写楽！ どうした写楽！」

長喜の口角には勝ち誇りの皺が縫い付けられていた。写楽はというと、うずくまったままである。表情は見えないが、ばつが悪そうな目元は背後からでも透けて見える。

「どうした！ なんでわざわざこっちに来た！ まさか俺に声をかけられるのを待っていたんじゃないかあるまいな！ そうやってこちらに責任を負わせる形で誑しこんでくるとは、とんだ性悪女だ！」

写楽は、長喜に背を向けたまま、やおら立ち上がった。その後、初めて出会った時のように、両ひざを念入りに払っていた。

「何とか言え写楽！ 俺もこの感じですつとがなり続けるのは辛いんだ！ ごめんなさいが素直に言えない性分だからな！」

と、口では言いつつも、照れ隠しで開き直る自分が長喜はたまらなく嫌だった。そんな風に自分のことを客観視している自分がいるのもまた嫌だった。

「先生。少し静かにしてください。素性がばれるとまずいんですから」

写楽がとろてん突きから滲み出てきたような濁った声を出した。目の前の男は、まだ長喜の方に向き直ろうとはしていなかったが、野暮ったい羽織に包まれた肩は小刻みに震えていた。右手は拳を作ったまま、ゆらゆらと揺れている。

「素性がばれたくないなら俺の近くを通ろうとしなければ良かったじゃないか！ 何かを期待していたのか！ また俺のおごりで芝居を見に行きたいのか！ 吉原か！ 蔦屋に会わせてほしいのか！ 南畝先生の書でも欲しいか！！ 歌麿の春画でいいか！ やい…」

振り子のように振れていた写楽の右手が長喜の袖をはっしとつかんだ。長喜もそれに合わせて、はっと息を飲んだ。

「先生。場所を移動しましょう。」

写楽が袖を引っ張るのに任せて、長喜は雑踏の中に足を踏み入れていった。ワイワイと騒いでいる雑踏の主たちは、二人の喧騒も気にかげずに右に左にと

流れていた。

「どうすんだ写楽！ 蔦屋に気に入られたいんだったら、自分の金で芝居を見に行つて、ひたすら役者絵を描き続けるぐらいの営業努力はしないと駄目だぞ！ 人に奢らせてばかりじゃ人望は得られんぞ！」

長喜は雑踏の中でも構わずに大声を喚き続けた。写楽の両肩は、相変わらずばつが悪そうである。

「経験者の俺が言つてんだから間違いないぞ！ ケチは友達を失くすんだ！ 友達を失くすと年とつてからが怖いぞ！」

「先生！」

写楽は立ち止まったかと思うと、ようやく長喜に正面から相對した。心なしか、今まで会つたときより整つた顔立ちをしていたため、長喜は一瞬恋に落ちそうになったが、多分気のせいだった。いや、恋というよりも、母性本能とか庇護欲とか、そういうものだろうか。こうやって余計なことを尾ひれにどんどん付け足していくから、台無しになるのである。

「先生。場所を移動しようとして申し上げたではないですか。少し静かにしてもらえませんか。」

写楽は濡れそぼつた生娘のように小さくなっている。

「お前は為朝にさらわれるのを待つていたお姫様だ。もつと、素直になつてほしいんだ。お前は、これからどうしたいんだ？」

道行く人々は相も変わらず、往来の真ん中で痴話喧嘩のように対峙している。大の男二人に気を留める様子がなかった。西日に当たりながら親の説教を受けている時のような蒸し暑さが、周囲にはこびりついていた。

「分かりません……」

「分からんことないはずだ！」

長喜は写楽が言い終わらないうちに般若のような形相で凄んだ。口髭が、天を突いていた。長喜の口から飛んだ唾が写楽の顔に当たつたが、写楽はそのために一瞬眉間に皺を寄せた。そういうことをする余裕がある写楽も、長喜はまた嫌いだった。

「お前さんは、八丁堀まで出向いてきた俺にわざわざ会いに来た！ お前のや

りたいことは鳶屋のもとではできないと明確に告げ、おまえもそれを分かったうえで去ったはずだったのに、おまえはわざわざ会いに来た！ どうせまだ未練があるんだろう！」

「長喜先生がそう思うんだったら、その考えに基づいて行動すればいいんじゃないですか！」

「だからお前のダメなのはそういうところだ！ 俺はもつと素直になれと言っているんだ！」

「今の長喜先生には一つの確信があるようですから、私が何を言ってもお考えは変わらないでしょう。私の意思をわざわざ確認することに何の意味があるんですか。長喜先生も私に未練があるんだったら、自分のためにその未練を遂げればいいではないですか。」

「だから！」

「私に『はいそうです』と言ってもらえないと動けないんですか？ 誰かに後ろから肩を押してもらえないと動けないんですか？ それは、あなたが今説教している相手と寸分違わぬ弱い人間ですよ。」

「それだ！」

自分のことを棚に上げてベラベラと悪口を並び立てる写楽に、長喜は言いよのない憤りを覚えた。写楽の言っていることが正論であるだけに、その憤りは一層激しく長喜の五臓を焼いた。

「それでいい写楽！ 俺が聞きたかったのはそういう言葉だ！」

もう、それっぽいことを言っただけで自分の憤りを誤魔化すしかなかった。自分でも支離滅裂なことを言っているのは分かったが、修正する余裕もなかった。二人の脇を通り過ぎる油売りが、訝しげな表情でやりとりを凝視していた。

「いいか写楽！ 人に頼ってばかりでは何も前に進まん！ お前の言う通りだ！ 俺はお前を売り出したい！ 鳶屋から売り出したい！ お前という原石を発見した才能を世間から賞賛されたい！ どうだ！ これがお前の好きな本質だ！」

一息に気を吐いた長喜の背筋を、汗が流れた。写楽は、諦めたような表情で目を丸くしていた。

「ようし。そうと分かれば善は急げだ。」

「はあ。」

長喜は先ほど来ずっと乙女のように自分の袖を握りしめていた写楽の右手を振り払い、勢いグツと写楽の手首を握りしめた。

「行くぞ。女買いに。」

「は？」

「お前みたいな性根の腐った奴は一回膿を出し切った方がいいんだ！ どうせ未通なんだろう！ お前みたいなナメクジ野郎に嫁の来手があるとは思えん！」

「あの先生。私には妻子がいますよ。」

「そうだ！ それでいいんだ！ 無理して上に合わせることはないんだ！ それがお前の生き方だ！」

当ての外れた長喜のはらわたは、先ほどからの憤りと併せて煮えくり返りそうになった。長喜には、そんなことに嫉妬している自分の普通さ加減も、たまらなかった。長喜は、またもそれっぽいことを叫んで臍物を焦がす紅蓮を鎮めるしかなかった。

「行くぞ。」

長喜は、あまりの怒りにその場に大股を開いて立ち尽くしていることに気が付いた。掴んだままの写楽の手首を引っ張って、またずんずんと歩き始めた。

「吉原ですか」

「根津だ。吉原は高いからな。」

「何だ。先生も結構なケチじゃないですか。人のことをエラそうに言えない。」
長喜のはらわたに写楽がまた松明を投げ込んできた。長喜は余りの怒りにすっ転びになったが、よろけ、跳ねながらも体勢を立て直し、またずんずんと歩き始めた。

「岡場所だ。武士が行くのは御法度なんだろうが、いい絵師になるにはそういう経験も必要だ。」

「経験で物を語る人ほど薄っぺらい人種もいませんがね。」

背後で手首を掴まれながら好き勝手を言い続ける写楽に、ついに長喜はその

場で棒立ちの状態になってしまった。長喜はおもむろに一歩ずつ足を動かし、その場で回転しながら写楽の方に向き直った。

「そうだ。返しておこう。お前が持ってきた庄屋の絵三枚だ。」

長喜の声音は、一回りして澄み切っていた。

その声音が青空を走り抜けている最中に、長喜はさきつと懐から写楽の絵を取り出した。丸めた絵は、皺くちやになっていた。

写楽はそれをそつと受け取ると、一枚を広げて見た。中からは、例の悲愴感漂う庄屋の両目がゆつくりと写楽を睥睨してきた。

「別にいいんですが先生、先生は絵師の割に絵そのものに対する愛みたくないものがあまりないですね。こんな粗末に扱う人をあまり見たことはありませんよ。」

写楽は画の中の庄屋と目を合わせながらぼそつと呟いた。その視線は細められ、頬と口元は緩んでいた。自分の作品なのにこんな態度をとれる写楽に、長喜は若干の寒気を覚えた。写楽がつぶやいた小言も、もう頭の中から雲散霧消していた。この男も、よほど自分のことが好きであるに違いない。自分と一緒に。

長喜はまた写楽の手首を引っ張ってずんずんと雑踏の中を切り分け進み始めた。写楽は若干つんのめりながら、急いで手に持った三枚の絵を懐にしまった。

八

「蔦屋！！！」

長喜が思い切って出した大音声は、店中に響き渡った。こちらに顔を向けている丁稚の目はキョトンとしていたが、蔦屋が出てくる気配はなかった。

「蔦屋！！！！」

長喜は更に大声で叫んだ。店先を通り過ぎる人々も、一瞬ビクつとして立ち止まったほどだった。

「せ、先生。蔦屋をお呼びですか？」

見かねた丁稚が、キョトンとした表情のまま訪ねてきた。手には、何かの本

を持っている。

「もう、いいぞ。」

奥の襖をガラガラと開けて出てきたのは、蔦屋だった。

「先生。そんな店先で大声出さないで、私に用があるなら奥に話を通してくださいよ。」

「そういうやり方だとお主は帰れって言うと思ったもんでな。他に聞いている奴がいる中で話をしようと思っただけだ。」

長喜は努めて鷹揚に振る舞った。努めすぎて、少し芝居がかった感じになったような気がした。

「先生にはこれまで色々ご協力いただいております。よっぽどのことじゃない限り、門前払いということはないですよ。」

「でも、南畝先生や歌麿みたいな超絶の売れ筋には及ばんだろ。あくまで中堅絵師の一人のはずだ。」

「……………」

蔦屋は、黙ってしまった。一流商人らしく商談時のべんちゃらならいくらでも出てくる男なのだが、長喜にはそういうべんちゃらが通じないことを分かったうえで沈黙かもしれなかった。

「それで、何のお話なんですか。」

「写楽だ。」

蔦屋の表情が、一気に強張った。

「もう結論は出たじゃないですか。うちでは、出せませんよ。」

蔦屋は表情を変えないまま言い抜けた。

「売れないものに金はかけられないってことだろ。」

「その通りです。」

「だから、今日はお主の気が変わる話を持ってきたのだ。」

長喜は、懷中に片手を突っ込んだ。

「なんです？ 写楽がついに売れそうな絵でも描いたんですか。」

「ハツハツハ。そんなんじゃない。」

言い終わらないうちに、長喜は黄金色にかがやく小判をドンと寿司ネタのよ

うに床に置いた。その黄金の半身は、生成りの懐紙に包まれていた。

蔦屋は、腕を組みながらその小判を眺めた。

前かがみになった蔦屋の顔は、眉毛の部分しか見えなかったが、そこからだけでも怪訝な表情をしているのは分かった。

「なんですこれは？」

蔦屋は顔を上げぬまま口を開いた。

「なんですもくそもない。小判だ。」

長喜は断腸の思いで声を絞り出した。余裕があるように見せつけたかったのだが、全然思い通りにはいなかった。

「くれるんですか？」

「金は、俺が出す。」

「はい？」

「写楽の絵を出すのに金が必要であれば俺が全部出す！！ だから、あれを売り出してくれ！！」

長喜はこの日一番大きな声を出した。再び通りかかった丁稚が、アメンボに貼りつかれたようなまぬけ面になっていた。

「先生。」

蔦屋は膝下に置かれた小判を手にとってゆっくりと口を開いた。

「役者絵を売り出すのにどれだけ金がかかるか知っていますか？」

「もちろんだ。小判一枚で足りるとは思っちゃいないさ。今出したそれは、俺の決意を忽せにしないための人身御供だ」

「先生もこれまで十分稼いだでしょうが、いかんせん人気では中堅。遅筆のためには作品数も多くはありません。無理は、なさらない方がいいです。」

「大丈夫だ。一回博奕を討つぐらいの金は持っている。いかんせん使う機会がないんでな。」

「それ以前に、絵描きの側が版元に金を出して絵を売り出すなんて前代未聞……」

「俺が金を出してやると言っているんだ。それで万一写楽の絵が売れば万々歳じゃないか。お主は、自分で危険を追わずに博奕が打てるんだぞ。こんな

うまい話はない。いくら前代未聞でも、儲かりそうな話なら誰かがやり始めるのが商売の世界つてもんだらう。」

「先生は、何でそこまで写楽にのめりこめるのですか？」

「あいつは、俺ら絵描きの希望なのだ。そしてそれは、俺そのものなのだ。」

「何を仰っているのか分かりませんな。」

蔦屋が両手を挙げた。先ほど長喜が懐から出した小判は、いつの間にか元あつた床に置かれていた。

「世の中には金を出してでも自分の話を本にしたい道楽の金持ちがいくらでもいるはずだ。そこをうまく突けばかなり大きな商売になるぞ…」

「三十両。」

長喜の話を制止するように、蔦屋が鋭く響く声を出した。

「顔料や紙の材料費、彫師や摺師の人件費、ああいう売れそうもない絵を出すことで耕書堂の評判が下がる危険を考慮して、それを補填するための損害の前払分なども込み込みで、三十両持ってきていただければ、話を前に進めます。」

「何枚出しても三十両か？」

「一枚で三十両です。まあ、枚数を多くするなら二枚目以降は単価が下がっていきますが」

「よし、わかった。」

長喜は断腸の思いで、筆舌に尽くしがたい断腸の思いで、腹から懐紙に包まれた小判を一つずつ取り出していった。

「奇遇だな。ちょうど三十両持ってきたんだ。ほれ、教えてくれ」

長喜が蔦屋との間に並べられた小判を手で指した。

「大丈夫だ。先生が一枚ずつ取り出す時にもう数えた。」

「本物かどうか確かめなくていいのか？」

「そうだな。」

長喜は一枚一枚に巻きつけられた懐紙を剥がしながら、小判を確認していった。

店の奥では、相変わらず何人もの丁稚が動き回っていた。

「長喜先生。あまり無理しなくていいですよ。長喜先生がこんなにお金を突っ込むような案件とは思えません。絶対に、売れないですから。」

蔦屋の辛辣な台詞と一緒に、小判の金と金とが擦れ合う「シャリシャリ」という音が冷徹に響いてくる。

「それに、写楽が本気なら、自分で金を出すなりもつと私に気に入られるように絵を変えてくるなりすると思いますが」

「そう言うことを一切しないから俺が金を出すわけだし、俺も金を出す気になったのだ。」

「ふうん。そんなもんですか。」

「お前さんも、結局この話を受けておるではないか。」

「私は商売人ですから、私が損しないと思った案件を進めるだけです。」

言い終わったと同時に、蔦屋が最後の小判を床に置き直した。

「三十両、確かにいただきました。それで、何の絵を描くんですか。」

「前に見せたらう。役者絵だ」

「役者絵なら歌舞伎を見たらうことになるんですか？」

「そうだ。」

「じゃあ観劇料も別途必要になりますな。あの絵師席は絵師用にとってもらってるもんですから。」

「ええ？ 連中はあそこもタダで貸してくれないのか？ こんなに歌舞伎人気に貢献しているのに。」

「まあ、それはもう言ってもしょうがないです。ええと、観劇料実費の前払分として、もう五両余計にいただきますようか。」

「エッ?! 五両!?!」

長喜が固まると、奥の襖がガラツと空いていつものように歌麿が顔を覗かせた。

「俺が……出そう……」

長喜は、物好きもいるものだと思った。完全に、自分のことを棚に上げていた。

「写楽？ ああ、写楽だけはやめておけ。見たまんまを描いてるから後で眺めておもしろいもんじゃないぞ」

「ふうん。そうなのか」

都座みやこざへ向かう道すがら、雑踏の中から観客たちの他愛もない話し声が聞こえてきた。人ごみの大流に一人逆らって都座へと進む長喜は、どこから聞こえてきたともつかない客たちの世間話に耳を背けようとしたが、すぐに前からやってき人の塊にもみくちゃにされて、話し声も聞こえなくなった。

ようやく都座の前までたどりつくくと、さっきまで芝居をやっていた熱気に長喜は気圧されそうになった。やはり客は、作り手を目の前にしていない客はとでも残酷で、だからこそいろいろなことを教えてくれる。長喜はそんなことを考えながら、中の役者絵の売場まで向かった。耕書堂からここまで出張している奉公人が、笑顔で出迎えてくれた。

「あ、長喜先生。どうされました！」

蔦屋だけあって、絵師である自分は丁寧に扱うよう教えが行き届いている。目の前の彼も、精一杯の愛想笑いを口角に浮かべていた。

「どうだ。写楽の絵の売上は。」

「全然ですね。」

蔦屋だけあって、全然教育は行き届いていないようだ。気遣いというものを知らない。

長喜は店頭きらに並べてあった雲母摺おおくびえりの大首絵を一枚手に取った。二代目

坂東三津五郎ばんどうみつごろうによる石井源蔵という役どころである。への字に結んだ口、異人かと思紛う大きな驚鼻に太い眉。乱れたもみあげは、まさにこれから仇と対峙しようという悲壮感を存分に現している。あの写楽が、主役を描いたというだけでも奇跡的な話なのである。それをここまで仕立て上げたというのは、やはり見事である。何日も都座に通い詰めた甲斐があったというものだろう。

「長喜先生。それなんか、まだ手に取って見ていく人がいるからマシな方ですよ。こつちの大岸蔵人おおぎしくらんどや奴袖助やつこですけみたいな脇役の絵なんか、見向きもされない

ですからね。」

「うん……」

長喜は鳶屋を相手にした時のような軽口も叩けず、石井源蔵の絵を手にしたまま大岸蔵人の絵に目をやった。やはり、雲母摺りがよく映えている。全部雲母にしたもんだから、随分高くついたらしい。

「この間なんか、なんて言ったかな、瀬川さんとかいう役者がここまで怒鳴り込んできましたよ。俺をこんな不器量に描きやがってって。慌てて店頭置いてあった絵を隠しましたよ。」

お前が不器量なんだから仕方ないだろう、と言いかけて長喜は飲み込んだ。目の前の奉公人は、屈託のない笑みを浮かべている。自分が金を出しているということが、知らされていないのだろう。長喜は苦笑いすることしかできなかった。

「そうです。耕書堂にも直々に偉いさんが来ているんです。」

長喜はぎよつとして振り返った。後ろには、鳶屋がいた。

「写楽の絵は役者からの評判がすこぶる悪くて、士気を下げるから、売らないで欲しいということでした。せめて、都座の売場からは撤去してほしいと。」

「そこまで嫌われているのか」

長喜はようやく一言絞り出した。鳶屋は、後ろで手を組み、ゆっくりと店頭
の絵を眺めている。

「先生が全部雲母摺りにしたいとか言うから一枚三十両じゃ足りなかったんですよ。写楽がこんなにたくさん絵を描いてくるとも思わなかったですし。」

「そうなのか。それは初耳だな。」

ということは、足りない分は鳶屋が持ち出しでやっているということなんだろう。最後まで黙っていれば粹なのに、と長喜は思った。

「まあ、そういうわけです。これ以上似たようなことを続けて他の版元に仕事
が移ってしまったら元も子もありません。今日を最後にここからは写楽の絵
を引き上げますよ」

「……………」

長喜が姿勢を動かさぬまま黙っていると、背後からドタドタという足音が聞

こえてきた。

「写楽先生ですか!？」

目の前に現れた若者は、顔の白粉を落とし切れておらず、目の周りにも朱が残っていた。ということは、役者だろうか。声や仕草は確かに若かったが、顔の表面は白粉で隠れて良く見えなかったので、もしかしたらもう少し年を食っているのかもしれない。

蔦屋は気にせずに写楽の絵をまとめて片付け始めていたので、長喜がこの闖入者に対応せざるを得ない雰囲気になっていた。

「写楽はおりませんが……、なぜ写楽がいるとお思いになったのですか？」

「いえ、絵師の先生が来ていると聞いたものですから。」

「申し遅れました。私は栄松齋長喜えいしょうさいちようきと言います。」

「長喜先生ですと!？」

役者はいまにも飛び上がりそうなのを必死で押さえながら内股で両肩を振るわせている。長喜は、そんなに役者絵を描いたことがない。歌舞伎役者の身分で、なぜ長喜の名前まで知っているのだろうか。

「私は二代目中村重助じゅうすけと言いまして、ケチな歌舞伎役者をやっております。」

「そうですかそうですか。今日も公演お疲れ様でございました。」

「もしかしたら、長喜先生には圓鏡えんきょうというお名前の方が分かりがいいかもしれませんか……。」

「圓鏡! というあの耕才志才の!？」

「ご存知ですか私のこと!?!」

圓鏡と名乗った男は、我慢できずに飛び上がってしまった。

「いや写楽とは、圓鏡さんの絵と写楽の絵は似ているなあというようなことを話していたんですよ。まさか、本職の役者さまだったとは……。」

「私も耕才志才に絵を持っていった頃から、写楽さんには注目していたんです。それが今回こうやって役者絵を大々的に売り出されることになって、やはり私なんかとは全然違う位置にいたんだな、すごいなあと改めて思ってい

ます。」

「ハッハッハ。写楽に聞かせてやりたいですね。」

長喜は写楽の表情を思い浮かべた。褒められることには、全く慣れていなさそうだった。

「写楽さんが今回描いた絵もすごいものばかりで、私は、改めて感動しています。役者からの評判はどうやらあまりよくないみたいですけど、頑張ってください！ 私も、写楽さんみたいに絵で身を立てたくなってきました！」

写楽はまだ全然絵で身を立てられていないが、その勘違いは正さない方がいいのだろうか。歌舞伎役者なら歌舞伎役者らしく、歌舞伎をやっていればいいのではないかとも思えたが、能役者をこの世界に引っ張り込んできた自分に言えた義理はなかった。

「ではすみません！ 失礼します」

圓鏡はぺこりと頭を下げると、竜巻のように去って行ってしまった。

「やめといてくださいよ。博奕は、失敗するんですから」

振り返ると、束にした写楽の絵を手に持った蔦屋がいた。興味が無いフリをしながら全部聞いているのがこの男の嫌らしいところである。

「先生のせいで人生を狂わせる人を増やしちゃあ良くないでしょう。」

「まあ、はつきり言えば圓鏡は写楽より一回り小さい絵師だからな……」

蔦屋は長喜の台詞を耳に入れる様子もなく、がに股でその場から去っていった。

長喜は、自分の懐を思い浮かべた。毎回三十両がかかるとしたら、あと何回ぐらい同じことができるだろうか。

「長喜先生！」

長喜は再びぎよっとした。振り向くと、写楽が立っていた。

「さっきそこで坂東三津五郎とすれ違ったんです！ やっぱり本物は違いますね！」

写楽はさっきの圓鏡よりも子供っぽくて、さっきの圓鏡よりも喜んでいた。

「そうか。良かったな。」